

青森放送

活動名	RAB 「子どもたちとつながり隊」
実施期間	令和6年9月～令和7年2月
実施回数	会場 15回

【事業実施の成果・課題】

読み聞かせ事業は放送とは違い、実際に人前で伝える「ライブ」の良さがあると思います。特に経験の浅いアナウンサーにとっては子どもたちの前で話すことが、伝えることの楽しさ・難しさを体感する機会になります。子どもは正直で、つまらないと思うと落ち着かなくなったり、食後だと居眠りをしたりします。子どもたちの反応から事業の課題を探ることも大切だと思います。今後は「防災教育」の部分をどう工夫するかが課題です。子どもたちにわかりやすく、そして実際に行動に移せるような伝え方を考えていきます。アナウンサー全員が防災士であることを最大限に活かした伝え方を各々で実践していきます。読み聞かせ事業を通して、今後も放送局が身近で、万一の際に頼りになる存在として信頼され続けるよう精進を重ねる必要があります。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

<鮫島アナウンサー>

後日子どもたち1人1人から御礼のはがきを頂き、感激しました。早口言葉や絵本の読み聞かせは、体感できる取組として子どもたちの興味・関心を引き起こす何かになると感じています。あわせて、青森放送で取り組んでいる防災教育についても、教材の充実や展開の工夫など、幼いころから身につくようメッセージを発信し続けていきます。

<猪股アナウンサー>

登場人物のセリフのところの声を使い分けたり、子どもたちの顔を見ながら読むと子どもたちはとても集中して聞き入っていた。3歳児クラスでは、読み終わった後に「もう1回読んで」とリクエストもあった。

<板橋アナウンサー>

「楽しく・悲しく読んでみよう」など参加型にするなど工夫しました。臨機応変・ライブ感を大切に取り組みました。子どもたちは自分の感情に素直だと感じました。

<吉崎アナウンサー>

特に本の読み聞かせは興味津々で真剣に聞いている児童が多数だったのが印象的だった。校長先生によると、本は好きだが、家で本を読む機会が減っている（家で読み聞かせをしない家庭が増えている）ようで、本の読み聞かせは学校としても機会を増やしたいと話していた。

<橋本アナウンサー>

音読やその作品を理解することが楽しいと少しでも思ってくれていれば幸いです。ご家族に今日学んだことを話したい！と笑顔で答えてくれたのが印象的でした。

<小山内アナウンサー>

4 歳児 15 人ほどだったが飽きずに楽しんできた。話の途中で「ワー」「ええ!？」とリアクションをとってくれて嬉しかった。最後にお礼ということで「ドレミの歌」「リズムの歌」を歌ってくれてとても嬉しかった。

<伊東アナウンサー>

日常の TV・ラジオの業務とはまた違うやりがいのあるこの活動を、今後ともアナウンス部を挙げて継続していけることを希望します。

<濱野アナウンサー>

どの学校でも真剣に防災教育や読み聞かせを受ける子どもたちばかりで、真っすぐな姿を見ていると自分の心も洗われるようでした。私としても、どうやったら子どもたちに集中して聴いてもらえるかを試行錯誤する時間が非常に有意義でした。

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

ラ・テ兼営局の強みとしてラジオとテレビの仕事内容を伝え、事前に配布した番組プログラムに目を通して様々な番組があることを感じていたようです。ラジオについては自身ではなく家族が聴いているという声もあり、間接的に感想を伺いました。また、緊張をした際の対処法を尋ねる質問が比較的多く寄せられました。「緊張は悪いものではない、適度な緊張は必要」と話し、子どもたちも納得していたようです。

絵本の読み聞かせでは、それぞれ声色を変えて読むなどの工夫をしたことに驚いていました。